

資料 22 三種の神器のイメージ ～ 記紀編纂当時の姿を想像する

八咫鏡のイメージ

八尺瓊勾玉のイメージ

草薙剣（天叢雲剣）のイメージ



平原古墳出土の内行花文八葉鏡（糸島市 HP より）

イラスト AC より

東大寺山古墳出土の素環頭大刀（東博画像検索より）

八咫鏡 天石窟に閉じこもった天照大神を表に出すため、天児屋と太玉により、御統、和幣とともに真坂樹に掛けられた（「書紀」神代第七段本文）。邇邇芸は天照大神から下賜されたとき、この鏡を我が御魂として斎き祭るよう命じられた（「古事記」神代天降段）。倭姫は天照大神（その神体が八咫鏡）を伊勢に祭った（「書紀」垂仁二十五年条）。それ以降伊勢神宮内宮に奉安されている、とされている。形代が現在皇居「賢所」にある。

八咫が鏡の周長を表しているとしよう。1咫は8寸（「説文解字」）、後漢時代の1寸は2.3cmなので、8咫は147.2cm。これを3.14で割ると八咫鏡の径は46.9cmあることになる。福岡県平原遺跡出土の内行花文八葉鏡の径が46.5cmであることから、八咫鏡はこれと同形との説がある。きれいに磨かれて光っていたことだろう。

八尺瓊勾玉 天石窟に閉じこもった天照大神を表に出すため、天児屋と太玉により、鏡、和幣とともに真坂樹に掛けられた（「書紀」神代第七段本文）。瓊瓊杵に下賜されて以降宮中にある、とされている。現在皇居「剣璽の間」に奉安されている。

八坂が8尺で長さを表しているとしよう。後漢時代の1尺は23cmなので、8尺は184cmとなる。櫛に掛けられていたのだから首飾り状だろう。瓊は通常は赤だが青という見方もある。青だとすると翡翠と考えられる。「古事記」には「八尺の勾玉の五百津の御統の玉」と記されているので、たくさんの小さな玉も連なっていると思われる。とすると、上図のようなイメージではないだろうか。

草薙剣 素戔嗚が退治した大蛇の尾から出現し、天照大神に献上された（「書紀」神代第八段）。瓊瓊杵に下賜された。倭姫が八咫鏡を伊勢に祭ったとき、一緒だった。倭姫が東征中の日本武に授け、日本武は尾張の宮寶媛の元にこの剣を置いて出立し、そのまま没した。このため以後熱田神宮に奉安されている（「書紀」景行四十年条）、とされている。形代が現在皇居「剣璽の間」にある。壇ノ浦の戦いで安徳天皇とともに海中に沈んだのも形代だった。

日本武伝説の原形が出来たと思われる6世紀中頃には、元は大蛇の尾から出てきた剣であるという伝承とともに、宮中に実在していたのだろう。とすると、4世紀末頃ヤマト王権が平定した出雲から服属の証に献上された剣と考えられる。小池伸彦によると（『古代の刀剣』p.15）、4世紀末にはまだ国内で本格的な鉄製刀剣の製作は始まっておらず、舶載品に頼っていた。素環頭の直刀ではないだろうか。磨かれて光っていたはずだ。